

共同研究プロジェクト「人類社会の進化的基盤研究（2）」2009年度第5回

日時：2009年12月5日（土）13時～18時30分

場所：AA研小会議室（302）

内容：

（1）制度一種と種の出会いから考える（伊藤詞子・AA研共同研究員／京都大学）

（2）群れからムラへ：「妬み」と「関係」の調整をめぐって（杉山祐子・AA研共同研究員／弘前大学）

内容の要旨：

（1）制度一種と種の出会いから考える（伊藤詞子）

ヒト以外の動物を対象とした制度についての議論は、チンパンジー属の食物分配を材料に黒田が詳細におこなっている（黒田1999）。それでは、食物分配以外にヒト以外の動物を対象に制度について考察を深められる材料はないだろうか？今村の制度の定義 — 「社会関係を維持運営するために作られたものはたとえ小さなものであっても『制度』といえる」（今村1992） — に従えば、食物分配以外にも制度的な要素は散見される。例えば、野生チンパンジーの母子間の関係は、その組み合わせによって多様であるが、その一方で、乳児であれば母親は授乳や移動時の運搬をおこない、子どもが自力で移動できるようになれば、移動の際に方向やタイミングを調整することは、どの組み合わせでも見られる。こうした相互の調整は、遺伝的なつながりによる必然性によって説明が可能だが、一方で、調整の実現は出産直後からの関わりの積み重ねに依存する（King 2002）。野生のチンパンジーは母子のみの孤独な世界で産まれるわけではなく、他の年齢も性別も個性もさまざまな多くのチンパンジーと暮らしている。さらに、そうした他のチンパンジーのなかには、血縁関係にあるか否かにかかわらず熱心に子どもと関わろうとする個体もいる。ときには、かなりの時間をそうした個体に「母親」が預けておくこともある（これには、もちろん子どもの側が他の個体を受け入れるという条件がつき、子ども自らが運搬される際に母親とそうした個体の間を行き来することさえある）。こうした個体は子どもにとっては年長者にあたるが、チンパンジー社会では年長者が年下のものの面倒をみることは一般的に認められる。チンパンジー社会では幼くして産みの親が死亡した場合には「養子取り」が一般に見られ、授乳をのぞくすべての世話がなされる（もちろん、オトナだけの都合で決まるのではなく、コドモの側の選択と依存の持続が必須）。このような場合、長期調査をおこなっていなければ、個体間関係のみから血縁関係の有無を判断することはほとんど不可能である。さらには、コドモは少々のことをして怒られないが、同じことをオトナがやれば攻撃されることがあり、オトナとコドモの社会的区別が彼らの生活のなかでも重要な位置を占めていると思われる。これらの側面は制度的なものとして考察を進めることも可能であろう。

一方で、もう一つ重要な側面がある。チンパンジーは、ヒトを含む霊長類のなかでもおそらく唯一、オトナがコドモのように遊ぶ種である。その組み合わせは、オス／メス、オトナ／コドモといったカテゴリーを超えたあらゆる組み合わせで、コドモ同士で見られる遊びとまったく同じ、追いかけてこやくすぐり合いなどがみられ、遊びの時に特有に発せられるプレイ・パントと呼ばれる笑い声も認められる。このことは、オトナ／コドモの区分が重要であると共に、そうした区分を乗り越える特徴を併せ持つともいえる。この乗り越えはランダムにおこなわれるわけではなく、「遊び」という交渉を形成する過程でおこなわれ、チンパンジー社会からこの区分が消失するわけではないと推測できる。この区分の普遍性と状況によって変更可能であるという柔軟性は、人間とチンパンジーの交渉においても見られる。国内の飼育チンパンジーと飼育者間の相互行為についての調査からは、彼らが相互行為の枠組みを、豊かなモダリティを駆使しながら、相互に幾重にも創り出していく様子が観察される。両者には枠組みを創り出すさいの注意の向け方やその配分に異なる点も見受けられ、上述の柔軟性とも関わっていると予想される。この柔軟性についての理解は、伝統的な制度的規則についての自然と文化の対立軸についての理解（例えば、レヴィ＝ストロース 2008； p. 66）に、別様の理解の可能性をもたらすものと思われる。

#### 引用文献

今村仁司 1992 『現代思想を読む事典』 講談社、東京。

黒田末寿 1999 『人類進化再考 ―社会生成の考古学』 以文社、東京。

King B. 2002. On patterned interactions and culture in great apes. In: Richard G. Fox & Barbara J. King, (Eds), *Anthropology Beyond Culture*. Berg, Oxford New York. pp:83-104.

レヴィ＝ストロース C. 2008. 『親族の基本構造』 青弓社、東京。

#### (2) 群れからムラへ：「妬み」と「関係」の調整をめぐって（杉山祐子）

本発表では「制度」を考えるにあたって、農耕と定住化に関わる集団のありように焦点をあてた。このとき、成員間の葛藤の処理や調整に関わる局面に注目し、農耕民社会の妬みと呪いにまつわるしかけを、集団の凝集性を生み出すしくみに関連づけて検討した。葛藤は、当事者性とその場性（いま、ここ）に埋めこまれているが、その場その場の交渉によらず、それを回避するやりかたを手に入れること、すなわち「いま、ここからの離脱」が、制度にもっとも近いと考えたためである。

農耕は、ある範囲の土地に一定期間留まることを前提とし、集住を必要とする。食料や労働力の相互供与システムの発達が、個としての食餌戦略から全体としての食餌戦略への転換を促

す。農耕は、集団の構造化を強めたムラを指向する生活様式である。そこでは集団を作ることそれ自体が重要な目的となり、社会的な緊張や葛藤の調整が根本的な課題となる。

集団が何らかの緊張関係を内包することは、狩猟採集民や牧畜民でも同様である。しかし民族誌の比較検討から、農耕民社会における緊張や葛藤の調整の局面で、「妬み」と呪いが特徴的に現れることが確認できる。農耕民における怒りや妬みの扱いは、人間の「内面」と内面に「感情」があることを前提している点で、狩猟採集民や牧畜民のそれとの違いをみせる。

多くの場合、「妬み」は普遍的な感情として当然視されてきたが、比較の観点からみると、人間の「内面」を想定し、万人が「内面にある感情」をもつと想定すること自体が、きわめて制度的であるといえる。また先達の指摘どおり、それをさらに制度化したものが呪いである（掛谷 1983 など）。

呪いが「妬み」によって発動する回路の想定は、「いまここ」の災厄を、妬みの現れや呪いの兆候として、「いまここ」とは別の位相へとずらす。二者間の社会関係の調整についてみると、それは当事者の直接交渉を通してではなく、「妬み」への予防的対処と、それが呪いとして発動する回路の管理や操作を通して、他者による制御可能なものになる。集団の成員の「内面」にそのような「感情」があると想定することによって、当事者同士が場面に応じてその行動を調整するはずの相互関係が、何らかの正当な方法で予め制御しうるものとして位置づけ直されることになり、制御する力をもつ専門家や権威を容認する素地が整えられる。